

救急車が必要なのは どんなとき？



～救急車の適正利用にご協力を～

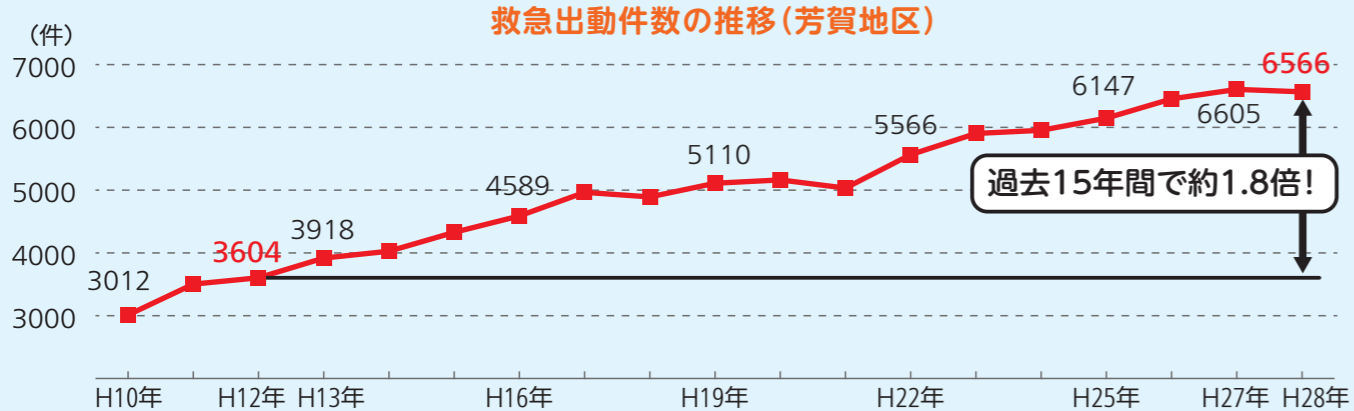
近年、救急車の出動件数・搬送人員数はともに増えており、救急隊の現場までの到着時間も遅くなっています。平成28年中の救急出動は芳賀地区1市4町で6,566件あり、搬送された人の40%は入院を必要としない人でした。緊急ではないのに救急車を要請すると、本当に救急車が必要な人たちが利用できなくなります。救急車や救急医療は限りある資源です。みんなで上手に利用し、救急医療を安心して利用できる社会を目指しましょう。

こうしたケースで救急車が呼ばれました

- ◆蚊に刺されてかゆいので早く見てほしい
- ◆海水浴に行って、日焼けした足がヒリヒリする
- ◆病院でもらった薬がなくなった
- ◆病院で長く待つのが面倒なので救急車を呼んだ
- ◆今日入院予定日なので病院に行きたい



本当に必要か
考えてみましょう



こんな症状なら、すぐに「119番！」

- 顔半分がしびれる、手足がしびれる
- ろれつがまわらない
- 視野が欠ける
- 突然の激しい頭痛・腹痛・高熱
- 急な息切れ・呼吸困難
- 意識障害
- けいれんが止まらない
- 冷や汗を伴うような強い吐き気
- 大量の出血を伴う外傷、広範囲のやけど
- 食べ物を喉につまらせ呼吸が苦しい
- 冷汗、顔が青い
- いつもと違う、様子がおかしい等



気をつけていますか、熱中症予防

7月から9月にかけては、気温・湿度が高い時期です。熱中症にならないよう、水分補給や暑さ対策をしましょう。

熱中症患者のおよそ半数は 高齢者(65歳以上)です！

- 1 体内の水分が不足**
高齢者は若年者よりも体内の水分量が少ない上、体の老廃物を排出する際にたくさんの尿を必要とします。
- 2 暑さに対する感覚機能が低下**
加齢により、暑さやのどの渇きに対する感覚が鈍くなります。
- 3 暑さに対する体の調節機能が低下**
高齢者は熱がたまりやすく、暑い時には若年者よりも循環器系への負担が大きくなります。

熱中症は、室内でも多く発生しています。 夜も注意が必要です。

予 防 法	
■ こまめに水分補給をする	■ 暑い時は無理をしない
■ 部屋の温度を測る	■ 緊急時、困った時の連絡先を確認する
■ 部屋の風通しを良くする	■ シャワーやタオルで体を冷やす
■ エアコン、扇風機を上手に使用する	■ 涼しい服装をする 外出時には日傘、帽子
	■ 涼しい場所、施設を利用する

日陰に入って涼もう！
水分・塩分をとろう！



暑い時は、無理をしないで！

熱中症予防強化月間 7月1日(土)～31日(月)

